

中国の大学教育改革と学生の教育経験の変化

—北京大学, 清華大学, 復旦大学を事例分析として—

比較教育社会学コース 施 佩 君

Higher education reform and the changes of college students' educational experiences in China

Peijun SHI

One of the foci of higher education reform in China is related to how students' learning experiences are channeled and guided. Chinese universities have been criticised for their excessive specialization. Attempts are made now to expose students to a wider range of knowledge.

In this paper I choose Peking University, Tsinghua University and Fudan University for the case study. These three universities are very progressive in China, and we will see the tendency of higher education through these three universities. From the results of the study, a conclusion can be made that the reforms have brought out a variety of changes in higher education and these have enriched students' experience.

目 次

- 1 問題関心と三つの分析モデル
 - A 問題関心
 - B 三つの分析モデル
- 2 市場経済への移行と高等教育改革
- 3 事例分析
 - A 北京大学
 - B 清華大学
 - C 復旦大学
- 4 三大学の共通点と変化の要因
- 5 課題と将来の展望

1 問題関心と3つの分析モデル

A 問題関心

中国の高等教育においてはかつて社会主義計画経済の下で、国家計画に従って教育・研究を行ってきた。ところが、1980年代後半から市場経済への移行が始まったことに対応し、従来の制度が抜本的に見直され、政府の統制が緩和され、市場原理や競争メカニズムを取り入れた改革が進められている。従来の計画経済体制下では、細分化された数多くの専門分野が存在し、大学卒業生は、政府による一元的計画のもとで職場に配

置されていた。しかし、市場経済の進展によって、学生は自ら職業を選択しなくなってきた。狭い専門分野の知識は計画経済の中ではある程度有効であったが、市場経済が進展した現在では仕事と結びつくのが次第に難しくなっている。市場経済化した現在の中国労働市場では、より広い知識や技能が求められるようになってきているのである。さらに2001年教育部によって「全国教育事業“十五”計画」が公布された。「2005年に高等教育の進学率を15%まで引き上げる」という目標が立てられ、中国の高等教育は大衆化段階に移行しようとしている。中国の高等教育は現在大きな変革期を迎えている。

このように現在中国の大学を取り巻く経済環境、社会環境が大きく変化している。こうした状況の中で、中国の大学教育(本論文では主に「普通高等教育の本科教育(中国の大学教育の形式は普通高等教育と成人高等教育に分かれる。普通高等教育のレベルは専科教育、本科教育、修士課程及び博士課程に分かれる。このうち、本科教育の修業年限は4-5年で、日本の学士課程教育に相当する。)」を指す)はどのような変化を遂げたか。先行研究では大学の入学選抜制度、カリキュラム、学習制度、卒業制度などを分析する際には制度そのものの変化に注目する研究が多い。しかし、制度の変化が学生にもたらす影響の研究は少ない。大学の主

要な主体は学生である。制度の変化が学生に影響を及ぼすということは言うまでもない。ここで、学生側から見ると以上の制度的な変化が学生にどのような影響を与えたかを考えたい。そのためには、どのような視点から見る必要があるのか。本研究では北京大学、清華大学、復旦大学の事例分析を通じて考えていきたい。

B 3つの分析モデル

学生の視点から見た変化を分析するにあたっては、次のことに留意する必要がある。入学選抜制度、カリキュラム、学習制度、卒業制度等は別々のものであるが、学生にとってはすべて自分の教育経験に関連するものである。すなわち、これらのものはすべて学生の教育経験に影響を及ぼすものである。さらに、学生の教育経験を積む過程は入学してから卒業までの過程としては1つの連続的な過程であり、分断されたものではない。「大学のあり方、教育のあり方、そして入学選抜を、ワンセットで考えられる必要がある」(金子2002)。本研究では学生が入学から卒業までの間に積む教育経験を入学段階、中間段階、卒業段階3つの連続的な段階として考えたい。

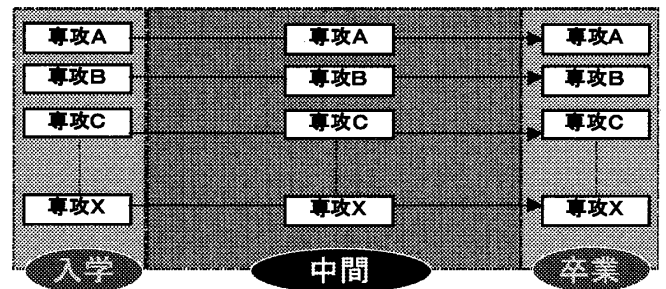
入学段階では、主に学生がどのような単位で募集されるのかに注目する。この段階のファクターは募集単位であり、これは学生の教育経験に影響する主要なファクターである。現在中国の高等教育システムでは募集単位は専攻(原語:専業)単位、学部(原語:学院)単位、文・理科単位の3種類である。

中間段階では、入学してから学生がどの程度の選択の幅を認められるか、どのような選択のチャンスを与えられるか、それによって習得可能な学生の知識構造、学生の知識分野等に注目する。この段階のファクターは単位制、学年制、カリキュラムの内容、「転学部・転学科」(原語:「転系・転専業」、以下は「転部」に略す)、副専攻と二重学位(原語:第2学位)等である。

卒業段階では、どのような人材として卒業するのかに注目する。たとえば、特定の専門職に就く人材として卒業する、或いは基礎が厚く、能力が高く、資質が高い人材として卒業する、等である。求められる人材像が、前の2つの段階をかなり決定している。

また、ここでは現在中国の高等教育改革の現状を踏まえた上で、入学段階の募集単位に基づいて3つのモデルを設定する。それぞれをモデルA(図1)、モデルB(図2)、モデルC(図3)と呼ぶ。

図1 モデルA



モデルAの特徴:

● 入学段階

募集単位は専攻単位であり、学生は専攻単位で募集される。専攻の幅が狭いほど、学生が習得しうる知識分野の幅が狭い。この募集方法は現在の高等教育システムで一番多く採用されている方法である。

● 中間段階

専攻単位として募集されて、中間段階でもその専攻の専門知識を勉強するのが期待されている。また、履修制度としては学年制と単位制を実施する2つの場合がある。

学年制とは、カリキュラムは学年ごとに配分され、1年の学習を単位として進級させる制度である。学年制を実施する場合は、カリキュラムの主要な内容は専門教育である。また、科目の多くは必修科目であり、選択科目は極めて少ない。さらに、修業年限も厳しく要求されている。「転部」は基本的には不可能である。ここではこの制度を実施するモデルをモデルAの原型と呼びたい。従来中国の高等教育システムは主にこの制度を実施していた。このモデルAの原型では学生の選択の幅も狭く知識分野も比較的狭い。

単位制とは、大学における授業の履修に係る学生の学修量をはかるもので、基礎的な量としての1単位数、全体の量としての総単位数及びそれを配分し、履修選択させ、学問的クレジットを与えるすべての過程から成る制度である(清水2000)。単位制を実施する場合は、選択科目が増え、学生の選択の幅が広げられ、学生の知識分野が広がるのである。さらに、学生の知識構造を多様化させるため、副専攻と二重学位を実施する場合もある。そして、「転部」の規定が緩和される場合もある。ここではこの制度を実施するモデルをモデルA'と呼びたい。現在中国の高等教育システムでは主にこのモデルを実施している。

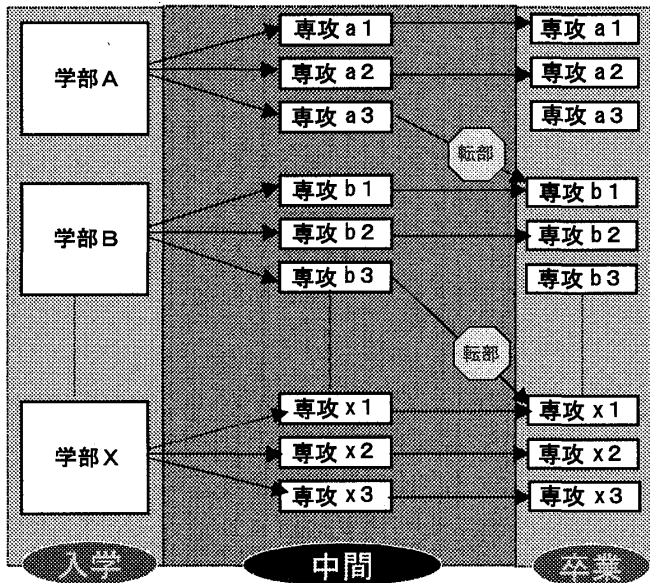
● 卒業段階

学生は主に専門知識を学習し、卒業段階では基本的

には専門知識を持つ「専門人材」(専門的な人材)として卒業する。

以上のことによって、モデルAでは特にモデルAの原型では学生の教育経験は同質的なものである。モデルA'では学生の教育経験は比較的多様になる。

図2 モデルB



モデルBの特徴：

● 入学段階

募集単位は学部単位であり、学生は学部単位で募集される。モデルAと比べると、募集単位が拡大される。この募集方法では、入学時点で、すでに習得しうる知識分野の幅が広いといえる。現在、北京大学と上海交通大学ではこの募集方法を実施している。

● 中間段階

学部単位で募集されるので、教育課程は2つの段階に分かれる。前期段階では学部ごとに教育を受け、後期段階では主に自ら自分の関心がある専攻を選択して専門科目を履修する。また、「転部」のチャンスも与えられる。学生は自分の関心を見つけ、大学や専攻を理解した上で、専攻を選択することができるようになった。さらに、副専攻と二重学位も実施されている。学生の選択のチャンスが前のモデルより増加する傾向が見られる。そして、履修制度としては主に単位制度が実施されている。また、必修科目は減少され、選択科目が数多く用意されているのである。

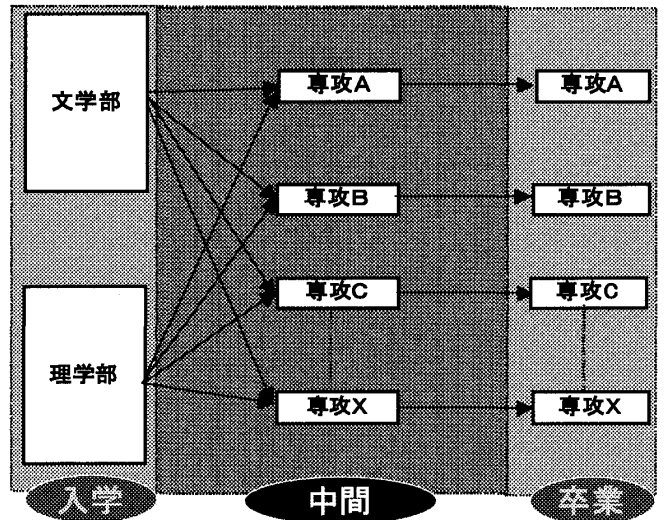
● 卒業段階

このモデルで求められる人材像は狭い「専門人材」ではなく、広い基礎知識、強い「創新」意識、基本的な人文修養、実践力、強い適応能力等を持つ資質が高い人

材像である。

以上のことによって、モデルBでは学生がより自由、多様な教育経験を積むことができる。

図3 モデルC



モデルCの特徴：

● 入学段階

募集単位は文・理科単位であり、学生は文科、理科2つの単位で募集される。前の2つのモデルと比べると、このモデルの募集単位が一番大きい。この募集方法はアメリカの高等教育システムの一部で見られる。現在、北京大学の「元培実験班」ではこの募集方法を実施している。

● 中間段階

文科、理科単位で募集してから、学生を文学部と理学部に入学させる。前期段階で学生は文、理学部で広範な知識を勉強することができる。また、後期段階に入って、全学範囲で専攻を選択することができる。専攻を自主的に選択できるため、後期段階で「転部」する必要もなくなる。履修制度は単位制度を実施されている。学生は大学側の提供する、多数の、幅広い科目の中で履修科目を選択することができる。

● 卒業段階

このモデルで期待されている人材像は基礎が厚く、能力が高く、資質が高い人材である。

以上のことによって、モデルCでは学生がさらに自由、多様な教育経験を積むことができる。

2 市場経済への移行と高等教育改革

前述したように中国の高等教育はかつて社会主義計

画経済の下で、国家計画に従って教育・研究を行ってきた。計画経済下では学生を細分化された専攻で入学させ、狭い範囲の専門知識を学習させ、また、中間段階での移動はほぼ不可能であり、ある専門分野にしか役に立たない「専門人材」として卒業させる。この時期はモデルAの原型の特徴を持っていると考える。このモデルの下では、学生の知識の幅は狭く、学生が入学から卒業まで積む教育経験も同質である。それゆえ、卒業生は仕事の就き初めには役に立つように見えたが、社会や科学技術の変化に適応しにくく、創造性に欠けている。

しかし、1980年代後半から市場経済への移行が始まったことに対応し、高等教育に関する政策転換も同時に行われた。一言でいえば、かつての計画経済に組み込まれ、政府の行きすぎた統制から、市場経済への移行に対応した市場ニーズに高等教育機関がより柔軟に対応することができる体制への転換である。そして、こうした背景の下で大学側はどのように変化を遂げてきたのか、以下に北京大学、清華大学、復旦大学の事例分析を通じて分析していきたい。この三大学はすべて中国の重点大学である。また、三大学は教育・研究の両面において全国でも優れた大学と言える。そのうち、北京大学と復旦大学は総合大学としての特徴が強く、清華大学は理工系の大学としての特徴が強い。従来の計画経済の下では、政府の強い統制によって、三大学における学生の教育経験はほぼ同質的なものであった。しかし、市場経済への移行に伴い、政府の統制が緩和し、この三大学における学生の教育経験はどのように

変化してきたか。以下では大学のそれぞれの改革段階から分析していきたい。

3 事例分析

A 北京大学

(1) 北京大学の改革

北京大学は中国の首都—北京市の北西部、燕園に位置している。中国の重点大学の中でも上位に置かれている総合大学である。現在、31の学部と14の系、271の研究所(研究センター)、13の国家重点実験室を擁している。専攻の数は、学士課程が100、修士課程が221、博士課程が199である。全国重点学科は81である。2003年の学生総数は、学士課程14,240人、修士課程が8,498人、博士課程が4,234人である¹⁾。

表1は北京大学の学生の教育経験の変化を「改革の新起点」(1978年-1984年)、「更なる改革」(1985年-1999年)、「世界の一流大学へ向かう」(2000年-現在)の3つの段階を分けてまとめた結果である。表1から見れば学生の教育経験は「改革の新起点」、「更なる改革」の段階ではモデルAの特徴を持っていたが、「世界の一流大学へ向かう」の段階では、モデルBの特徴を持っている。教育経験の各段階の変化を見ると、入学段階では専攻単位から学部・系単位(「元培班」では文・理科単位)までの募集単位の拡大の変化が起きた。そして、中間段階では主に「転部」と二重学位に関する規定の緩和や、選択科目の増加などによって、学生の選択チャンスが増え、選択の幅も広がったと言える。それゆえ、

表1 北京大学における学生の教育経験の変化

改革の段階 教育経験の段階	改革の新起点 (1978年-1984年)	更なる改革 (1985年-1999年)	世界の一流大学へ向かう (2000年-現在)	
	専攻単位	専攻単位	全学 (元培班を除く) 学部・系単位	元培班 文・理科単位
入学段階 (募集単位)				
中間段階	学年単位制 選択科目の増加 基礎の強調	「転学部・転学科」 二重学位	高学年の専攻選択 科目の自由選択 「転学部・転学科」 修業年限の弾力化 「本科生資質教育・教養教育 選択科目」、二重学位 チュートリアル・システム 卒業要件の減少	完全単位制 修業年限の弾力化 専攻の自由選択 チュートリアル・システム
卒業段階	専門人材	専門人材の「予備軍」	広い基礎知識、強い「創新」 意識、基本的な人文修養と実戦力 強い適応能力を持つ資質が高い人材	基礎が厚く、 能力が高く、 資質が高い人材

学生の知識面も広くなり、知識構造は多様化している。卒業段階の人材像も従来の「専門人材」から、「専門人材」の「予備軍」、そして現在は広い基礎知識、強い「創新」意識、基本的な人文修養、実戦力、強い適応能力を持つ資質が高い人材へ大きく変化したのである。北京大学では、学生が入学から卒業まで積む教育経験も大きく変化したと言える。

(2) 問題点

① 部分と全体の関係

2003年から医学部、外国語類の専攻と地質学を除いてほとんどの学部・系で入学者を学部・系単位、学科別で募集することが実施されていたが、各学部・系によって専攻振り分けの時期が異なっていた。たとえば、数学科学学部の振り分け時期は第5学期で、環境学部は第3学期である。これは各学部・系が個々の専門領域をある程度守った結果であると考えられる。しかし、北京大学の学士課程教育の目標は「元培班」の教育モデルを全学で実施させることである。すなわち、将来、北京大学では募集単位を現在の学部・系単位から「文科大類」、「理科大類」、「工科大類」へ転換しようとしている。こうした改革を進める中で、低学年において各学部・系の境界をいかに取り去るのが重要な課題である。

② 改革の成果のフィードバック

現在、北京大学の改革は未曾有の速度で進行している。例えば、2000年9月に打ち出された「本科生資質教育・教養教育選択科目」の科目数が37しかなかったが、2002年に256まで増加した。3年のうちに5倍以上も増加した。また、2002年に13の学部と系は学部単位と系単位で、化学、哲学、新聞学は学科別で募集が行われたが、2003年から医学部、外国語類の専攻と地質学のほかに、ほとんどの学部・系は入学者を学部・系単位、学科別で募集することが実施されるようになっている。成果が十分に検討されないまま、改革は次から次へと進められている。成果を検証し、改革に反映させていくことも重要な課題である。

③ 学生をいかに適応させるか

こうした早いスピードで進められている改革の中で、学生をいかに適応させるのかも重要な課題である。たとえば、「本科生資質教育・教養教育選択科目」を楽な科目として履修する学生も現れるし、「転部」に関する規定が緩和されれば、「人気」がある専攻に集まる恐れも出てくる。学生の選択の幅が広がったが、うまく選択できる学生もいるし、選択に失敗する学生も現れる。

こうした学生への対応が必要である。

1999年に北京大学は「北京大学創建世界一流大学計画」を公布した。この計画は17年間をかけて、2段階に分けて実現させる。前の7年間は第一段階で、基礎準備段階である。その後の10年間は改善及び全面的に推進する段階である。この2段階を経て、2015年までに北京大学を世界の一流大学に成長させる。そのためには、これらの課題をいかに解決するかが、世界の一流大学への鍵である。

B 清華大学

(1) 清華大学の改革

清華大学は北京市の北西部、北京大学の東隣、清朝の皇室庭園の遺跡上に建設され、清華園というところに位置している。中国の重要な高等教育と科学研究の中心であり、国内外で著名な高等学府である。現在、清華大学は12の学部の下に48の系があり、76の研究所(センター)、15の国家重点実験室を擁している。専攻の数は、学士課程が51、修士課程が139、博士課程が107である。国家重点学科は49である。学生総数は、学士課程が14,177人、修士課程が7,921人、博士課程が4,214人である²⁾。

表2から見れば、清華大学の学生の教育経験は「改革の新起点」(1978年-1992年)、「世界の一流大学へ目指す」(1993年-1999年)、「更なる改革」(2000年-現在)の3つの段階を経て大きな変化が起きたということがわかる。「改革の新起点」、「世界の一流大学へ目指す」の段階ではモデルA'の特徴を持っていたが、「更なる改革」の段階ではモデルBへ移行しようとしている。教育経験の各段階の変化を見ると、入学段階では専攻単位から一部の学部・系(経済管理学部、理学部、信息科学技術学部、精密儀器与機械学系、力学系等)が学部・系単位まで変化した。また、募集単位を次第に拡大する傾向もある。中間段階では単位制の改革、「転部」に関する規定の緩和、「学部—大学院—貫育成方案」、一部の学生は高学年の専攻選択チャンスが与えられるなどによって、学生の選択チャンスが増加された。また、大学生研究訓練計画の実施などによって、学生の実践力も高められた。さらに卒業段階の人材像は従来の「高級工程技術人材」(高度な工学技術人材)から「資質が高い、レベルが高い、知識と能力が多樣的、創造力がある人材」へ大きく変化したのである。清華大学では学生が入学から卒業まで自由、多様な教育経験を積むことができるようになったと言える。

表2 清華大学における学生の教育経験の変化

改革の段階 教育経験の段階	改革の新起点 (1978年-1992年)	世界の一流大学へ 目指す (1993年-1999年)	更なる改革 (2000年-現在)	
入学段階 (募集単位)	専攻単位	専攻単位	主には専攻単位	学部・系単位 (一部)
中間段階	「計画的・指導的 単位制」 二重学位	単位制の改革 選択科目の増加 副専攻と二重学位 「学部-大学院一貫 育成方案」 大学生研究訓練計画 (SRT)	資質教育の重視 卒業要件の減少 「転学部・転学科」	高学年の専攻選択 学部基礎科目の強調
卒業段階	高級工程技術人材 (高度な工学技術人 材)	人材育成目標の ハードルがさがった、 基礎能力と適応能力が強い、 「創新」能力を持つ人材	資質が高く、 レベルが高く、 知識と能力が多様な 創造力がある人材	基礎が厚く、 幅が広く、 自主的な学習 ができる高い 資質を持った 創造的な人材

(2) 問題点

① 系と学部の関係である。現在清華大学では学部一括募集を実施している学部(経済管理学部)もあり、系一括募集を実施している系(精密儀器与機械学系, 力学系)も存在している。学部一括募集を実施すると、系の管理を弱める恐れが出てくる。1950年代に確立された系という学科組織の役割を変換させるのは容易なことではない。信息科学技術学部の「系ごとに募集と管理を行い、学部ごとに育成する」という改革はこうした矛盾の表れである。系と学部をいかに融合するのか重要な課題である。

② 改革に対する教師の認識の持ち方も重要である。たとえば、多くの大学では専門教育が依然として重視されている中、専門教育の不足を心配する教師も存在している。長い間に教師の頭の中に存在した専門教育に対する考え方等を変換させることは容易ではない。

③ 学生をいかに改革に適応させるのかも重要な課題である。たとえば、学生に選択のチャンスを与れば、選択に成功する学生もいるし、選択に迷う学生も出てくるであろう。或いは「楽勝科目」しか履修しない学生も現れるであろう。こうした学生の対応が必要である。

④ 清華大学が目指す目標は、2011年に総合型、研究型、開放型の一流大学になることである。しかし、2004年清華大学の募集定員は3,300人であったが、文科類の募集人数は290人であった。文科類の募集専攻も法学、新聞学、英語、日本語、漢語言文学、文科実験班、中外文化総合班と工商管理類の8つだけである。

従って、清華大学では少なくとも教学資源のところで総合型の大学へ転換する準備ができていない。

清華大学の目標は2011年に世界の一流大学に成長することである。それまでには3つの段階がある。1994年-2001年は基礎を定める段階であり、2002年-2005年は重点建設段階であり、2006年-2011年は躍進する段階である。現在清華大学は重点建設段階であり、それゆえ、改革の中で残された課題をいかに解決するかが次の段階への決めてである。

C 復旦大学

(1) 復旦大学の改革

復旦大学は中国の大都市-上海の北部に位置する大学である。「江南第一学府」と呼ばれ、「211工程」(21世紀に約100校の重点大学・重点学科づくりのための計画)と「985工程」(1998年に政府が出した北京大学、清華大学、復旦大学をふくめ、9大学を世界一流の大学に育成する計画)に組み込まれた大学でもある。2000年4月、復旦大学と上海医科大学は合併した。合併前の復旦大学は7の学部と34の系を擁し、学士課程の学生総数は8,741人、修士課程と博士課程の学生総数は4,355人であった(陸昌祥 方晶 2000)。合併後(2003年)復旦大学の学科組織は14の学部と71の系までに大きく拡大した。専攻の数は、学士課程が73、修士課程が148、博士課程が103である。全国重点学科は40である。学生総数は、学士課程が15,738人、修士課程が6,538人、博士課程が2,862人である。また、77の研究所と112の

研究センター、5の国家重点実験室を擁している³⁾。

表3から見れば、復旦大学ではモデルA'の特徴を持っているが、「改革の新起点」(1978年-1993年)、「更なる改革」(1994年-1999年)、「世界の一流大学へ向かう」(2000年-現在)の3つの段階を経て大きな変化が起きたことがわかる。この変化は主に中間段階と卒業段階で起きた。中間段階では主に単位制の改革、「転部」と副専攻、二重学位に関する規定の緩和などによって、学生の選択チャンスが増加された。また、「教師を中心とする」の教育理念から「学生を中心とし、教師が主導する」へ転換させることによって、学生の学習への積極性が高められ、より個性的な発展ができるようになると思われる。卒業段階の人材像は従来の専門家から「資質が全面的で、質の高い人材」へ転換した。復旦大学では学生が入学から卒業までより自由、多様な教育経験を積むことができるようになったと言える。しかし、復旦大学は依然としてモデルA'の特徴を持っている。

(2) 問題点

① 2000年4月、復旦大学と上海医科大学を合併した。しかし、この2つの大学は学科組織においても歴史伝統においても異なる特徴を持っている。いかに両大学を実質的に融合させ、それぞれが持っている特色を生かすこと、2つの大学に適合しているカリキュラムの設置等は復旦大学が直面している重要な課題である。

② 復旦大学では2002年から「転部」に関する規定が緩和された。2003年に337名の定員が提供されたが、実際申請した人数は481名に達していた。物理、数学等基礎学科を申請する学生も少なくないが、より多く

学生が集ったのはやはり「英語」、「経済学」、「金融学」、「法学」、「生命科学」等人気がある専攻である。たとえば、「金融学」専攻の「転部」の定員数は5人であったが、実際転入希望がある学生は40人にも達している。一部の学生は自分の関心、趣味に合わせて「転部」を申請したかもしれないが、大多数の学生はやはり将来の職業とつなげるために「転部」を申請する可能性があるかもしれない。以上のことは学生の職業志向だけでなく、労働市場における人材の需給状況にも大きな影響を与えると考える。大学側と社会側がどのように対処するかは新たな課題の1つである。

③ 復旦大学では2001年、2002年連続2年教学計画について大きな改訂が行われた。教学計画の改訂によって学生の履修状況、学習の積極性等にも大きな影響を及ぼすと考える。これらのことをどう解決するかは課題の1つである。

④ 復旦大学では「教師を中心とする」の教育理念から「学生を中心とし、教師が主導する」へ転換させようとしている。これを転換させるのは学生の選択幅を広げ、学生の個性的な発展を尊重することだけではなく、教師たちの意識改革も重要である。また、教師だけではなく、ほかの事務職員の意識改革も必要である。なぜなら、教師と事務職員は、それぞれ異なる立場や視点で、学生と接する機会を持っているからである。学生のニーズを踏まえつつ、学生を適切に指導して行くためには、教師と事務職員が連携して対応して行く必要がある。この教育理念をいかに本格的に実現させるのかは大きな課題である。

復旦大学の目標の1つは近い将来、専攻を分けず、「文理基礎科目群」を構築することである⁴⁾。すなわち、学生は最初の2年間は専攻を分けずに「文理基礎科目

表3 復旦大学における学生の教育経験の変化

改革の段階 教育経験の段階	改革の新起点 (1978年-1993年)	更なる改革 (1994年-1999年)	世界の一流大学へ向かう (2000年-現在)
入学段階 (募集単位)	専攻単位	専攻単位	専攻単位
中間段階	学年単位制 副専攻、二重学位 基礎の重視	単位制の改革 チュートリアル・システム 選択制	資質教育の強調 「転学部・転学科」 副専攻と二重学位 「教師を中心とする」の教育理念から「学生を中心とし、教師が主導する」への転換
卒業段階	実際の仕事を従事する幹部、技術人材と管理人材	専門的な人材ではなく、基礎が広く、能力が強い人材	資質が全面的で、質の高い人材

群」の教養教育を受け、その後、自分の発展に適合する専攻を選択する。現在は人文類、法学政治類、経済管理類、数学、自然科学、技術科学、医学の7の科目群があるが、それらを文、理2種類に統合させることである。また、もう1つ現在復旦大学では開設している科目数は1,800であるが、それを3,000まで増加させること。さらに復旦大学の最終的な目標は世界一流の大学に並び立つことである。以上の目標の達成は一朝一夕にはできない。改革中に浮き彫りになった課題をいかに迅速に解決するのが肝心なことである。

4 三大学の共通点と変化の要因

A 変化の共通点

以上分析してきたように北京大学はモデルA'からモデルBへの転換を実現させた。清華大学はモデルA'からモデルBへ移行しようとしている。復旦大学は依然としてモデルA'の特徴を持っているが、様々な改革が行われた。三大学それぞれ変化の段階は異なるが、以下のような変化の共通点が見られる。

入学段階：

従来この三大学は全て専攻単位で学生を募集していたが、現在では募集単位を拡大させる動きが見られる。そのうち、北京大学の募集単位が一番大きい。表4を見ると三大学の学生総数はあまり変わらないことがわかる。しかし、表5を見ると北京大学の学部と系の数が一番少ない、学科組織の数が少ないことは改革を促

表4 三大学の学生数

大学名	学部	大学院		合計
		修士	博士	
北京大学	14,240	8,498	4,234	26,972
清華大学	14,177	7,921	4,214	26,312
復旦大学	15,738	6,538	2,862	25,138

表5 三大学の学科組織

大学名	学部	系	専攻(学士)	専攻(修士)	専攻(博士)	全国重点学科
北京大学	31	14	100	221	199	81
清華大学	12	48	51	139	107	49
復旦大学	14	71	73	148	103	40

表6 三大学における現在の人材育成目標

大学名	人材育成目標
北京大学	広くて厚い基礎知識、強烈的な「創新」意識、科学的方法を身につけ、基本的な人文修養や良好的な独学能力と実戦力、強い適応能力を持つ資質が高い人材
清華大学	資質が高い、レベルが高い、知識と能力が多樣的、創造力がある人材
復旦大学	資質が全面的で、質の高い人材

進した理由の1つかもしれない。

中間段階：

三大学では修業年限に関する規定、「転部」に関する規定の緩和の動きが見られる。また、三大学では副専攻と二重学位の履修システムが柔軟になった傾向が見られる。

卒業段階：

表6から三大学における人材育成目標には以下の共通点を見出すことができる。「高い資質」、「高いレベル」、「創造力があること」この3つである。これらの言葉の中には「専門人材」という言葉が見当たらない。それゆえ、三大学では全てで人材育成目標を転換したと言える。

以上は三大学各段階における改革の共通点をまとめてみた。従来の同質な教育経験と比べて、学生たちはより自由に、多様な教育経験を積むこともできるようになったのである。また、清華大学はモデルA'からモデルBへ移行しようとしている。さらに北京大学と復旦大学はモデルCを実現させようとしているのである。

B 教育経験の変化の要因

ここでは学生の教育経験を変化させる要因を以下のように分析した。

(1) 社会、経済環境の変化：計画経済から市場経済への移行に伴い、さらに科学技術の進展、情報の高度化、経済のグローバル化などによって、社会の需要が次第に多様化、流動化してきたことにより、国家が社会の需要を把握し、統合的な政策をつくるのが難しくなった。大学側が自らから社会の需要に応じて、適応しなければならなくなった。

(2) 知識そのものの変化：日進月歩の科学技術進展によって、知識の陳腐化が早まった。

そして、研究が細分化される一方で、知識は高度化

されつつある。そうした結果、学科間の融合が促進され、学際的な学科の増加がもたらされるのである。

(3) 学生の変化：大衆化段階への移行に伴い、大学の進学者が増加したことによって、入学時にも明確な将来像を欠いた学生が増えている。こうした学生のニーズに対応した大学教育が求められている。

(4) 大学自身発展要求の変化：三大学の最終的な目標は世界の一流大学に並び立つことである。一流大学に並び立つために、人材育成もきわめて重大な課題である。

5 課題と将来の展望

ここでは学生の教育経験に関する改革の課題と将来の展望をいくつか提示したい。

(1) モデルB、モデルCを実現するためには三大学では学科組織の面においても教員意識の面においても大きな課題が存在している。

(2) 大学はより自由な学習環境を学生に提供する一方で、大学という組織全体をうまく機能させるために、制度的なものを必ず必要とする。学生の移動、選択はあくまでも制度の制約内で行われなければならない。どこまで学生を自由にさせるか、どこまでコントロールするかという点は大学が教育改革を行う際に、或いはモデルの移行の過程において、1つの重要な課題である。そして、教育の質の保証としての学位のありかたも大きな課題となる。

(3) 大学の最も基本的な機能は学生の教育である。各大学の改革は学習する側である学生の立場に立ったものとして進められる必要がある。すなわち、学生の立場に立った大学づくりが必要である。

(指導教官 金子元久教授)

註

- 1) 北京大学ホームページの「北京大学基本データ 2003」より
- 2) 清華大学ホームページの「学校基本データ」より
- 3) 復旦大学統計年鑑 2002
- 4) 新華網 2002年11月04日記事より

参考文献

- 王学珍・黄文一等 1998.4『北京大学紀事』北京大学出版社
 黄福涛 2000『1990年代後半の中国における学士課程カリキュラムの構造—日中比較の視点から』『大学論集』

- 金子元久 2002『大学入試の転換点』IDE『現代の高等教育』2002.10
 陸昌祥・方晶 主編 2000.4『復旦大学2000—2001年報考指南』上海遠東出版社
 清華大学教育研究所編著 1991.4『繼承与發展—新時期清華大学教育改革実験与研究』清華大学出版社
 清華大学校史研究室編 2001.4『清華大学九十年』清華大学出版社
 大塚豊 1996.1『現代中国高等教育の成立』玉川大学出版部
 張曉鵬・王修娥『关于復旦大学本科課程改革若干問題の問卷調查与分析』
 李曼麗 1999.12『通識教育—一種大学教育觀』清華大学出版社
 林小英・陳向明『不同的視角 不同的声音—来自教師和学生对大学本科課程的看法和建議』
 『2002年本科教學培養方案』復旦大学教務処編 2002.6
 『復旦大学的改革与探索』復旦大学出版社 1987.5
 清華大学ホームページ：<http://www.tsinghua.edu.cn/chn/index.htm>
 復旦大学ホームページ：<http://www.fudan.edu.cn/>
 北京大学ホームページ：<http://www.pku.edu.cn/>